第33巻・第6号　昭和28年5月15日第三種郵便物認可　昭和60年6月1日（毎月1回1日発行）

牧草と園芸

イタリアンライグラス特集号

イタリアンライグラスの主要病害の診断と防除のポイント(1)

雪印種苗㈱千葉研究農場〈西原〉

かさ枯病

Pseudomonas syringae pv. *coronafaciens*

網斑病

Drechslera dictyoides f.sp. *dictyoides*

斑点病

Drechslera siccans

●かさ(暈)枯病　かさ枯病はイタリアンライグラスの病害のなかでは、春早くから発生するものの一つで、被害は一番草に多い。早春に現われる病斑は黒褐色で不整形の斑点、または葉脈に沿って伸びた条斑で、病斑の回りは水浸状となる。季節が進むと楕円形または紡錘形でチョコレート色の病斑となり、その回りに黄色いかさ(暈)が現われることが多い。多数の病斑が現われると、互いに合わさり、激しい葉枯れを引き起こすので被害が大きい。品種・系統間に強弱の差がある。

●網斑病　暖地で最も普遍的に見られる病害の一つで、その全生育期にわたって病斑が見られるが、被害は二番草及びそれ以後に激しい。本病の病斑は、主として葉に発生する。初め褐色の小点が不規則に群がって現われ、これは直ちに細い線となり、広がるにつれて不規則な網目を描く。この網目は葉の全面に広がることもあれば、葉のあちこちに網斑を作ることもあり、また葉脈に区切られながら広がり幅1～5㎜の筋になることもある。いずれも網目の中は、しばらく緑色を保っているが間もなく黄化し、やがてチョコレート色に変わり、枯れる。多湿な日にはその病斑上にかびが認められる。品種・系統間に強弱の差があり、また個体間にも病斑型に相違がある。出穂すると被害が大きくなるので刈遅れを避けることがたいせつである。

●斑点病　秋播きの暖地のイタリアンライグラスでは年内から下葉に病斑が現われ、早春から徐々に上の葉に広がり、出穂するころには急に目立つようになる。病斑は葉に所を決めず現われ、ややくすんだ褐色をした長径0.5～2㎝の楕円形をしている。病斑は広がるにつれ濃淡の紋理が現われることがある。それは普通は不鮮明であるが、ときに鮮明で乱れた輪紋状または豹紋状となる。病斑の中心に小さな眼点状の退色部が現われることがある。品種・系統間で発生の多少や病斑の形状に差異がある。